

2025年度 大学入学共通テスト の出題傾向と今後の入試動向

学校法人 河合塾 地歴・公民科

1 はじめに

2025年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）は、大学入試センター試験の後継として5年目の実施となり、2022年度の高校1年生から適用された新学習指導要領に沿った新課程入試としては、1年目の実施であった。

志願者数は495,171人と前年から3,257人増加（前年比101%）し、7年ぶりに増加に転じた。これは、18歳人口増に加えて、現役生志願率が過去最高となったことにもよる。

科目別受験者数（本試験）は、「地理総合、地理探究」125,622人、「歴史総合、世界史探究」69,273人、「歴史総合、日本史探究」114,599人、「公共、倫理」29,042人、「公共、政治・経済」127,120人であった。河合塾「共通テストリサーチ」による各科目の得点分布は図1のとおりである。

2 2025年度共通テストの出題傾向

「地理総合、地理探究」の第1問・第2問は「地理総合」第1問・第2問との共通問題である。大学入試センターが事前に公表していた試作問題と比べると、判断に悩む

設問が少なく、受験生は取り組みやすかったと考えられる。基本的な知識を踏まえて、統計集、統計地図、グラフなどの資料を組み合わせた読み取り問題で構成されており、昨年までと同様に、思考力とともに短時間に判断する情報処理能力が試されている。出題分野については、「地理総合、地理探究」のほぼ全分野から満遍なく出題されている。

「歴史総合、世界史探究」の第1問は「歴史総合」第2問と共通問題、第2～5問は「世界史探究」からの出題である。試作問題と比べると、「歴史総合」では日本史分野のみの小問がなく、世界史の割合が高かった。また、「世界史探究」では設問数とページ数が減少したが、資料や会話を丁寧に読み込む必要があったため、時間的な余裕はなかっただろう。すべての問題で資料（史料文、図版、地図、表、グラフ）の読み取りが出題され、会話文や資料から必要な情報を的確に読み取り、習得した知識と組み合わせて総合的に判断する力が試されている。出題分野については、「歴史総合」では近代化の問題が半分を占め、「世界史探究」では前近代史からの出題が多い。

「歴史総合、日本史探究」の第1問は「歴史総合」第1問と共通問題、第2～6問は「日本史探究」からの出題である。試作問題と比べると、「日本史探究」では大きな違いはなかったが、「歴史総合」では世界史分野の割合が高く、日本史の知識だけでは対応できない問題が複数あったため、やや難化した。高校生の学習・探究活動を題材とした会話文で構成された問題が複数出題され、「日本史B」と同様に歴史事象への理解の質と思考力・判断力が試されている。出題分野については、「歴史総合」では近代化からの出題が多く、「日本史探究」では社会経済からの出題が多い。

「公共、倫理」と「公共、政治・経済」は、ともに第1問が「公共」第1問、第2問が「公共」第4問との共通問題で、第3～6問は倫理分野または政治・経済分野

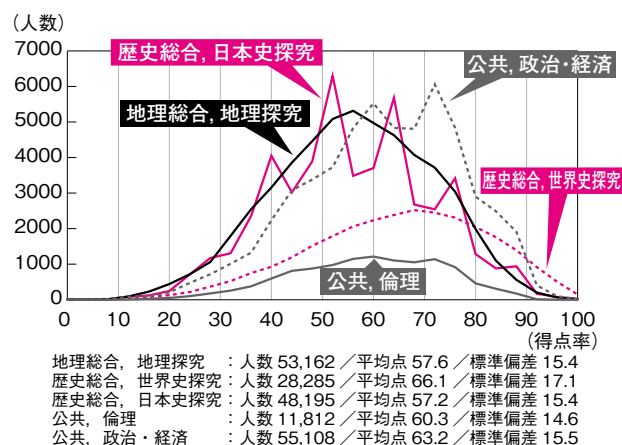


図1 共通テストの科目別得点分布
(河合塾「共通テストリサーチ」による)

からの出題である。試作問題と比べると、公共分野、政治・経済分野は、試作問題のような複雑なものではなく、標準的な学習で対応できる。倫理分野では、より踏み込んだ知識を問う設問がある。公共分野では、知識問題のほか、複数の資料を用いた多様な出題形式があり、思考力・判断力を試されている。倫理分野の第5問は、新課程で新たに扱われた認知の心理学を中心とした出題で、試作問題で出題された連動式問題が含まれる。政治・経済分野の第6問の問2は、過去問では見慣れない計算を要する問題だが、解答は十分に可能である。

3 今後の入試の動向

いずれの科目でも、大学入試センターが示している「思考力・判断力・表現力を問う」という問題作成の考え方は、新課程になっても踏襲されている。そのため、今後もこれまで同様、基本的な知識を十分に理解した上で、解答に必要なポイントを迅速につかめるかどうか、高得点獲得の分かれ目となるだろう。

「地理総合、地理探究」は、今後も問題文や図表の量が多いことが考えられるため、いち早く題意を理解し判断する力が求められている。出題形式は、第2問までは「地理総合」との共通問題で、地球的課題や国際理解、地域調査などの分野から、第3問からは「地理探究」から自然環境と自然災害、資源と産業などの系統地理の分野と特定の地域を扱った地誌が出題されると予想される。

「歴史総合、世界史探究」の世界史探究分野では、今後も出来事の内容や因果関係、背景、影響、時期などを把握していないと解けない問題が多く出題されると予想される。したがって「タテのつながり」と「ヨコのつながり」を意識して学習するのがよいだろう。歴史総合分野の対策としては、普段の世界史探究の学習の際、同時期の日本の状況を確認する癖をつけておきたい。

「歴史総合、日本史探究」の日本史探究分野では、今後も史料・図版・略系図・地図・グラフ・統計表など諸資料を利用した設問が多く出題されると予想されるため、多くの問題演習を行い、資料の読解力を高めることが重要である。歴史総合分野は全体の4分の1の配点を占めるため、高得点を目指すなら、歴史総合教科書の世界史分野の学習にも丁寧に取り組むことが有効である。

「公共、倫理」と「公共、政治・経済」は、出題割合が「公共」から25点、「倫理」または「政治・経済」から75点だったが、2026年度においても、同様とな

ることが予想される。「公共」で学習する事柄には、「政治・経済」と重なる部分が多い一方で、宗教や思想など、「倫理」の入り口となるような学習事項もあり、幅広い分野からの出題は今後も続くと思われる。教科書や資料集の精読を通して知識を積み上げ、多様な資料を読み解く力や、示された情報を活用して事例を判断する力を磨き上げることが必要だろう。

なお、2026年度より、共通テストの出願手続きが電子化されるため、出願方法についてよく確認しておきたい。

▶国公立大二次試験・私立大入試

国公立大学や私立大学の大学独自試験の出題範囲については、「総合科目」+「探究科目」5単位分の出題範囲とする大学（例えば北海道大学、名古屋大学、慶應義塾大学（商学部を除く）など）と、「探究科目」のみ3単位分の出題範囲とする大学（例えば東京大学、京都大学、早稲田大学など）に二分されている。同じ大学でも、地理では「地理総合」を出題範囲に含むが、世界史および日本史では、「歴史総合」は含まないとする大学も多い。新課程入試元年であった2025年度入試は各大学で旧課程生への配慮が公表されていたが、2026年度以降は「歴史総合」がどの程度出題されるのか、注視していく必要がある。2025年度入試については、東京外国語大学（本誌p.18 **例題1** 参照）、一橋大学、名古屋大学において、日本史・世界史の共通問題として歴史総合の分野から出題されたことは大きなトピックスであった。その他、慶應義塾大学、中央大学など、小問での出題も含めると、複数の大学で「歴史総合」を意識した問題が出題されていた。

出題形式としては、国公立大学の二次試験では、これまでと変わらずに、ほとんどの大学で論述形式が採用されており、表現力が問われる形式が継続されている。また、国公立大学と私立大学ともに、これまでグラフや図版などの資料を用いた出題がなかった大学においても、資料を用いた出題が見られ、知識だけでなく、思考力・判断力を問う大学側の意欲的な姿勢が強く感じられる出題が見受けられた。

今後とも、資料を分析・考察しながら、課題解決のための力をはかり、因果関係や時代概観を把握しているかを問う問題、さらに国公立大学を中心に「考察、構想したことを効果的に説明する力」が問われる問題が継続して出題されることが予想される。